

V. L. パリントンの問題点

大 井 浩 二

かつて『アメリカ思想主潮史』3巻(1927-30)の著者V. L. パリントンについて語った際、つぎのように書いたことがある。

いずれにせよ、現在のわが国において、パリントンが「古い」というレッテルをはりつけられ、全面的に無視されていることは否定できない。ぼくとしても、ここで欠陥だらけの文学史家パリントンの復権を要求するつもりはさらさらないので、『アメリカ思想主潮史』とともにアメリカ人パリントンまでもが忘れられてしまっている、というのがぼくのかねてからの不満なのだ。あの悪評高い文学史を彼に書かせた内的衝動は、一体なんであったのか。いってみればパリントンにおけるアメリカ人の研究というテーマに、ぼくは強く惹きつけられるのである。(「V. L. パリントンとアメリカ神話」『英語文学世界』1973年4月号)

本稿においても、こうした立場からパリントンという歴史家の問題点を考えてみたいと思うのだが、とくに彼とジェファソン主義との関係を「アメリカ神話」という角度から取りあげることにする。

1 進歩としての歴史

『アメリカ思想主潮史』第1巻の序文のなかで、パリントンは彼の著書の主題についてつぎのように説明している。

わたしは伝統的にアメリカ的とみなされるにいたったいくつかの根本的な

概念の、アメリカ文学における発生と発達を——その概念がどのようにしてアメリカに生まれたか、それはどのような反撥を招いたか、アメリカ人の特徴的な思想や制度の形態と規模を決定するにあたって、その概念がどのような影響をおよぼしたか、などを説明しようとつとめた（I iii）。

この言葉は、「初期から1920年にかけてのアメリカ文学に関する一解釈」という副題にもかかわらず、彼の著者が単なる文学史ではなくて、あくまでも思想史であったことを物語っている。と同時に、彼の意図がアメリカとはなにか、アメリカ人とはなにか、というアイデンティティの探求にあったこともまた、明確にされているのである。

さらにパリントンは、政治、経済、社会の多方面にわたる資料を分析するにあたって、彼の立場が「保守的というよりはリベラル、連邦主義的というよりはジェファソンの」(I i) ことを、はっきりと公言している。アメリカ史の主流を考えるにあたって、ジェファソンとハミルトンによって代表される「敵対的な哲学」がアメリカ社会に支配的な影響力をもっていたことを強調しているのは、あまりにも有名な事実である。だが、このようにパリントンがみずからの立場を鮮明に打ちだしたことは、一体なにを意味しているのだろうか。保守的な連邦主義とリベラルなジェファソン主義との対立は、歴史家パリントンを考える場合に、どのようなかわりをもってくるのか。こういった疑問に答えるためには、パリントンがいわゆる進歩主義の歴史家であったという事実、まず注目しなければならない。

あらためて指摘するまでもなく、この派の歴史家は歴史をあくまでも「進歩」としてとらえようとする。ジーン・ワイズの適切な解説にしたがうと——

進歩主義の歴史家は、経験が進歩となるように現実を並べようとした。彼らは人間を過去から解放することを望んだので、そのために人間を伝承された思考や行動の形態から自由にするための作戦をとらねばならなかった。彼らの仕事は、伝導者のな「フォーマリズムへの反抗」、つまり古いもの、圧迫

するもの、不毛なものに対する新しいもの、自由なもの、ダイナミックなもの
の挑戦であった。そのことはまた、しばしば彼らの頭のなかで、新世界と
してのアメリカと旧世界としてのヨーロッパが対立することを意味していた。⁽¹⁾

結局のところ、パリントンやF. J. ターナーやチャールズ・A・ヒアードによ
って代表される進歩主義の歴史家にとって、「進歩」とは旧世界ヨーロッパか
ら新世界アメリカへの「進歩」を意味していた。D. W. ノーブルの言葉をかり
ていえば、それは「制度や伝統の複雑さから自然の状態の単純さへの進歩⁽²⁾」に
ほかならなかった。あるいは、ヨーロッパの「制度や伝統の複雑」から解放さ
れ自由になるという意味で、進歩としての歴史は同時にまたりベラリズムとし
ての歴史であったということもできる。

『アメリカ思想主潮史』の第1巻は、とくに17、18世紀のヨーロッパから植
民地にはいつてきた思想を取り扱っているが、それがどのようにして「進歩」
としてのアメリカの歴史に結びついているか、というのが、パリントンの中心
主題になっているのである。たしかに、17世紀の初頭にアメリカ大陸へわた
ったイギリス人たちの理想は、この地上に神の王国を、ジョン・ウィンスロップ
のいわゆる「丘上の町」を建設することだった。宗教的に墮落したヨーロッ
パ、とくにイギリスを否定し、宗教改革の精神が純粋な形で完全に実現した世
界を築くことだった、といいかえてもよい。しかし、新大陸におけるイギリス
人たちは、彼らの母国の文化遺産を捨てることができなかつた。旧世界から
新世界への「進歩」を可能にするために、「二つの大陸の申し子」(I iv) とし
てのアメリカは、「明確にアメリカ的と呼ぶことのできる一連の思想」を生み
出すのに役立つ「胚珠的な貢献」をヨーロッパに仰がなければならなかつた
(I iii)。では、旧世界ヨーロッパから新世界アメリカに移植された「若木」は、
一体どのような形で「アメリカ的な思想」や「新鮮なユートピアづくりの計画」
を促すことになったのだろうか。

パリントンの指摘によると、初期のアメリカにはいくつかの重要な思想的対
立があったが、その一つは「リベラルな政治哲学と反動的な神学、イギリスの

組合教会主義とイギリスの長老派教会主義とのあいだの激突」であって、ここから「初期のニューイングランドの発展のコースを大きく決定する闘争の大体の特徴」が出てくることになる（I iv）。もう一つの対立関係は、「フランス派」と「イギリス派」とのそれである。前者がロマンティックでユートピア的であったとすれば、後者は現実的で物質主義的であり、前者が正義と人間の権利に関心をもっていたとすれば、後者は搾取と貿易の権利に興味を示していた。前者が「アメリカの新開地」に浸透している理論であったとすれば、後者は「商業的な都市」において支配的であった（I v）。さきにふれた「リベラルなジェファソン主義」と「保守的な連邦主義」の対立も、この「フランス派」と「イギリス派」のそれに還元できるのである。

こうして、17、18世紀のアメリカの指導者たちは二つの陣営にわかれて対立することになるが、パリントンは「リベラリズムの主演」として、ロジャー・ウィリアムズ、ベンジャミン・フランクリン、トマス・ジェファソンの三人をあげ、それに対抗する人物としてジョン・コットン、ジョナサン・エドワーズ、アレクザンダー・ハミルトンの三人をあげている。この二つのグループの対立は、「初期アメリカのさまざまな傾向を、具体的な形であらわしている」が、そこから生まれたのが「君主制と貴族制の原則の廃止、および大陸的な規模の共和主義の実験への出発」であった、とパリントンは考えている（I vi）。つまり、前者のグループが勝利を占めることによって、ヨーロッパ的な遺物としての「君主制と貴族制」がなくなり、新しい「共和制」が誕生するにいたるという形で、「制度や伝統の複雑さから自然の状態の単純さへの進歩」という理想が達成されるのである。この点をもうすこし詳しく検討することによって、みずからをリベラルで、ジェファソンのと規定したパリントンの立場を明らかにしてみたい。

パリントンはまず、ジョン・コットンに最大級の賛辞を呈している。コットンの「野心」は「政治的な権利が宗教的な服従にしたがうヘブライ的な国家を建設すること」であったが、「その野心のために捧げた疲れを知らない熱意と学識にあふれた聖書学上の権威」のゆえに、「ニューイングランドの神学者の

なかで最高の者」であったといっても過言でない（I 33）。にもかかわらず、『アメリカ思想新潮史』の著者にとって、コットンは否定し去らねばならない存在であった。それはコットンの「理想主義」を「彼がカルヴィン主義者で、チャールズ一世時代の紳士であったという事実」から切りはなすことができなかったからにはかならない（I 30）。「チャールズ一世時代の紳士」がきわめてヨーロッパ的な「抜きがたい貴族」（I 31）であったというだけではない。パリントンはカルヴィン主義に対していささかの好意もいだいていなかったのである。

宗教改革時代の北ヨーロッパにおいて、支配的な神学体系はルターとカルヴィンのそれであったが、両者を比較した場合、ルターはカルヴィンよりも「神秘的であると同時に実際のであった」（I 11）とパリントンは考える。前者が「そのインスピレーションを主として新約聖書から得て、キリスト教徒としての生活の創造的な根源をキリストの魂との精神的同化に見出していた」とすれば、後者は「はげしく、ヘブライ的であって、愛よりも正義を重視し、旧約聖書のなかに掟を求め、権威的な体制に重点をおいていた」と考えられる。さらにまた、「創造的な影響力において、前者はあくまでも個人中心主義的であり、後者は階級組織的であった」とも書かれている。この点をパリントンはさらに強調して、人間性に対する信頼性を欠いたカルヴィン主義があまりにも「貴族的」であったことを指摘したあと、ヨーロッパからの移民がカルヴィンのな体系をたずさえてアメリカにやってきた事実は「一つの不幸」とみなさなければならない、とさえいい切っている。ジョン・コットンをはじめとする神学者たちは「思想の自由な空間におそれをなし、頑丈な防壁のうしろにおいてのみ身の安全をおぼえることのできた連中」（I 12）であった。したがって、彼らが作り出したのは「せまくて、冷たい」「牢獄」にはかならなかった。中世的なヨーロッパの束縛を否定した移民たちが、新世界アメリカを「牢獄」に変えたというのは、いかにもアイロニカルな事態であった。パリントンのカルヴィン主義を批判したのは、それが旧世界と深いつながりをもっていたからであり、それゆえに新世界アメリカにおける「進歩」のさまたげになったからであ

る、といいかえてもよい。

「貴族」で「カルヴィン主義者」であるコットンは、したがって、「自由への願望」を「自然人の罪ふかい衝動、神の選ばれた支配者たちの正義にあふれた権利に対する否定」（I 31）とみなしていた。たしかに、この神学者には「社会的な革命家」としての一面があったことは否定できないとしても、「新しい出発がなされなければならない新しい土地」（I 32）アメリカにおいて、彼が最終的にめざしていたのはなにであったか。「教会と国家の民主主義的な構成」を危険な傾向と考えるコットンは、それを阻止するために「総督たちに力をかしたえること、あらゆる批判者から神学上の理想を守ること」をひたすらめざしていた、とパリントン考える。その結果、新世界アメリカに出現したのは「露骨なまでに少数独裁的な政治体制」であったが、これはまさに「民主主義の否定」（I 34）にほかならなかった。結局のところ、「絶対主義の影」のもとで育てられ、「民主主義の信念」を理解できなかったコットン（I 37）は、「進歩」としての歴史に歯止めをかける、きわめて非アメリカ的な存在であったとされるのである。

だが、このコットンにいわせると、彼の「ブリリアント・アンタゴニスト」であったロジャー・ウィリアムズは、まさに「悪事をはたらく人間」であった。ウィリアムズはおろかにも「内容のない空想」を追いかけるばかりであって、「サタンに身をゆだねている」としかいいようがない、とはげしく非難している。だが、『アメリカ思想主潮史』の著者は、「よりよき秩序の追求者、より高貴で、より人間性にあふれた社会の味方」（I 75）としてのウィリアムズを、きわめて高く評価しているのである。

パリントンにとって、ウィリアムズは「17世紀のピューリタンの論客」であったというだけでなく、「超絶的な神秘家としては、エマソンの先駆」、「思弁的な求道者としては、チャニングやユニテリアンたちの先駆」、「政治哲学者としては、ペインやフランスのロマン派の先駆」（I 75）であった。だが、なににもまして重要なことは、「民主主義者で、キリスト教徒」としてのウィリアムズが時代に先んじた存在であったという点である。その結果、コットンにとって

自明の事柄が、ウィリアムズ目から見ると、時代錯誤以外のなに物でもなかった。「光の子」としてのウィリアムズは「人間性にあふれた、リベラルな精神」の具現者でもあり、コットンに代表される神権政治とは異った社会秩序を模索していたのだが、その彼の理想を理解できない当時の人びとは、「とまどい、怒って、彼を追放し、荒野のなかで彼の夢を夢みさせた」（I 62-63）のである。あらためて指摘するまでもなく、彼を追放した人びとのなかには、マサチューセッツ湾植民地のコットン・マザーやジョン・コットンが含まれていた so であつた。

ウィリアムズの偉大さは、新世界アメリカに宗教改革の理念を生かそうとした点にある。その意味で、彼は代表的なピューリタンであつたといえよう。たとえば、彼はやがてコットンが就任することになるボストン教会のポストを拒絶しているが、その理由はこの教会が不純な、ローマカトリックとの妥協の産物であるアングリカニズムと手を切っていなかつたからである（I 64）。彼が「ボストンの権威者たち」と衝突したのは、コットンその他の聖職者たちがヨーロッパの残骸をとどめているカルヴィン主義の信奉者であつたからにほかならぬ。コットンとウィリアムズの本質的な相異点は、つまるところ、後者の「思想のルーター的な起源にさかのぼることができるにちがいない」（I 12）とパリントンは書いていた。ウィリアムズが「ルーターの信奉者」（I 70）であつて、「プロテスタント的な個人主義の権化」（I 65）であつたというパリントンの主張は、彼がヨーロッパ的な堕落を否定する人間であつたことを、重ねて強調しているのである。

さらに、政治学者としてのウィリアムズを重視するパリントンは、彼の政治理論を仔細に検討したあと、彼が「個人の探求の権利という宗教改革の原理」を徹底的に押しすすめた「個人主義者」であつたことを（I 72）、高く評価している。またしても宗教改革の理念が呼びこまれている点に、読者は注目しなければならない。したがつて、「君主制が利己的な目的にかなつてゐるナショナリズム」のまえにルーター流の「リベラリズム」が姿を消すのを目撃したウィリアムズにとって、ロードアイランドに「民主主義の原理にもとづく共和国」

を建設することは、なににもまして重大なことであった。ロードアイランドが「強制的な絶対主義という古い不幸な失敗」(I 72)をくりかえすことがあつてはならなかったからである。この「強制的な絶対主義」がカルヴィン主義とともにヨーロッパの「制度や伝統の複雑さ」を示していることはいうまでもない。さらにまた、「厳格な政体」を恐れたという点で、ウィリアムズはトマス・ペインやジェファソンにまさるとも劣らなかつたという指摘 (I 72) は、パリントンのジェファソンの立場からいって、やはり見落とすことのできない意味をもっている。

いずれにせよ、「もっとも誠実なキリスト教徒」(I 74)であったロジャー・ウィリアムズが、当時のアメリカにおいて「社会の敵」(I 75)とみなされたことは、新世界の歴史に大きな影響をおよぼすことになった。ウィリアムズとコットン、それにそれぞれが代表する組合教会派と長老派は、いずれも新世界アメリカを「彼ら独自の特別なユートピアが根をおろすための、天から授けられた機会」(I 53)と考えていたから、両者の対立には、「ニューイングランドにおける未来社会の形態——貴族的になるべきか、民主的になるべきか」という大問題がからまっていた。それは、はたして新世界が旧世界の重圧をはねのけ、きっぱりと訣別することができるかどうか、という大問題にはかならなかつた。したがって、ウィリアムズが「社会の敵」とみなされたことは、「進歩」としての歴史にとって、大きなマイナスであつたといわざるを得ない。

だが、結局のところ、それはきわめて一時的な現象にすぎなかつた。ロードアイランドにおけるウィリアムズと、ハートフォードにおけるトマス・フッカーの活躍ぶりにふれて、パリンソンはこう書き記している。

彼らがそれぞれのやり方で、マサチューセッツの神権主義的な指導者とおこなつた長い闘争は、ニューイングランドのその後の発展に大きく影響をおよぼすことになった。結局は、ボストンの長老派主義がハートフォードの組合教会主義に屈することになる。マサチューセッツ湾植民地ではなくて、コネチカットとロードアイランドとから、後年、大きく伝播して、のちの世代が

好んで記憶するようになったニューイングランドを形成する、あの民主主義の原理と制度が生まれたことを忘れてはならない（I 53）。

この発言にもまた、長老派主義から組合教会主義へ、神権政治から民主主義へ、ひいてはヨーロッパからアメリカへの「進歩」を信じるパリントンの姿勢がはっきりとうかがわれるのである。

こうした「進歩」のプロセスは、18世紀にはいと、さらに明確な形をとりはじめる。この世紀の初期から中期にかけてのアメリカは、文化面においてはまことに貧弱であったが、パリントンにいわせると、この時期は「民主主義的なアメリカの創造力ゆたかな春」(I 131)と呼んでもいい時期であった。こうしたアメリカの形成期において、とりわけ重要なのはフロンティアが果たしていた役割であったことを忘れてはならない、と『アメリカ思潮主潮史』の著者は主張する。

この記憶に残っていない歳月は、処女地の荒野の大きなカシの木やカエデの木などよりもっと重要な邪魔ものを切りはらうのに忙しかった。つまり、古い思想の習慣を根こぎし、階級に支配されたヨーロッパで古い、威厳をおびたものとなっていた社会的習慣を打破していたのである。意識されてはじめて重大な意味をもつことになる新しい心理が、広大な空間によって形成されていたのである（I 131）。

フロンティアにおいて、古いヨーロッパの過去や習慣が否定され、新しいアメリカの空間が、その無限の可能性が発見されていた、といいかえてもよい。ここでのパリントンが「アメリカの思想はヨーロッパの伝統になに一つとして負っていない、という主張の基礎を築いている」というD.W.ノーブルの発言は、その点を適切に指摘したものといえよう。⁽³⁾

こうしたフロンティアとしての新世界アメリカを頭において考えたとき、はじめてパリントンがジョナサン・エドワーズとベンジャミン・フランクリンと

を対照的に論じている理由が明らかになってくる。パリントンはエドワーズを取りあげるにあたって、まずその「生涯の悲劇的な失敗」(I 162)を強調する。なぜなら、すぐれた哲学者であったにもかかわらず、エドワーズは哲学の分野をすてて、「神学というひからびた領域」にひきずりこまれることになるからである。しかも、「ニューイングランドの精神を一つの体系のなかに閉じこめる」という仕事に天与の才能を没入するのが運命であったにもかかわらず、「その体系からニューイングランドの精神を解きはなつたことを、彼の性質と能力は彼に命じていた」(I 163 傍点引用者)のである。これはまことにアイロニカルな状況であった。彼のもっとも有名な著作である「意志の自由について」(1754)でさえも、結局は「ニューイングランドの知的生活を窒息させている保守主義の、最後の偉大な擁護」にほかならなかった(I 157)。

すでにふれたように、パリントンにとって、カルヴィン主義はヨーロッパの形骸をまとった反アメリカ的な宗教思想であった。18世紀にはいると、それは急速に「適切な作業仮説」(I 150)であることをやめ、人間生活におよぼしていた影響力を失いはじめる。たとえば、カルヴィン主義の重要な教えの一つである「人性全悪説」にしても、聖オーガステインやジョン・カルヴィンの生きていたヨーロッパ、古い墮落した旧世界においてのみ通用する概念であって、ニューイングランドの「村の世界」では、その社会的拘束力を失わざるを得ない、とパリントンは書いている。その理由として、「ニューイングランドの村の日常生活は素朴な美徳によって——神や人間に対する憎しみだけでなく、隣人に対する親切と厳格な倫理的な掟への忠実さによって、活力をあたえられていた」という事実をあげている。「ニューイングランド」を「新世界」に置きかえ、「素朴な美徳」のまえに「フロンティアの」という表現を補えば、パリントンのいわんとするところが一層明確になるだろう。このように、カルヴィン主義が新世界アメリカにおいて存続することができなかつたとすれば、それに「高貴な天賦の才能」を傾注したエドワーズの生涯は、まさに悲劇的であったとしかいいようがあるまい。

それと同時に、18世紀のアメリカにジャン・ジャック・ルソーの思想が紹介

されたという事情も見のがすことができない。自然の状態にある人間、文明の悪に染まる以前の人間を賛美して、自然にかえれ、を旗じるしとするこのフランス哲学者の主張は、「村とフロンティアで育まれた人間」にとって特別の意味あいをもっていた、とパリントンは考える（I 151）。ルソーは「人間の完全性」を「人性全悪説というドグマ」の上位においていただけでなく、あらゆる種類の権威への反抗をうながしていた。当然のことながら、このような思想はカルヴィン主義の精神とまっこうから対立することにならざるを得ない。新世界アメリカのフロンティアと密接な関係をもっていたルソーの思想と、そのフロンティアとまったく無関係であったカルヴィン主義——このコントラストは、エドワーズの生涯のむなしさを、「超絶主義的な解放者となるのが天職であったのに、カルヴィン主義者にとどまっていた」（I 163）彼の人生のアイロニーを、くっきりと浮かびあがらせているのである。

こうしたエドワーズとは対照的に、フランクリンは「アメリカが生み出したもっとも偉大で、もっとも有益な人間の一人」（I 165）であった。その点を明らかにするために、パリントンは彼のさまざまな特性をあげているが、とくに重要なことは、フランクリンが「ルソーの本のページから抜け出したような魅力のある、朴訥な哲学者」であった、という事実である（I 164）。これだけでもカルヴィン主義を擁護した哲学者エドワーズとは対照的な存在であったといえようが、フランクリンほど「完全に習慣の偏見から自由であった人間は、アメリカには一人もいなかったし、ヨーロッパにおいても少数であった」というパリントンの発言は注目に値する。ここでの「習慣」という言葉は、すでに引用した一文のなかで、フロンティアの生活が「古い思想の習慣を根こぎし、階級に支配されたヨーロッパで古い、威厳をおびたものとなっていた社会的習慣を打破していた」と書かれていたことを思い出させる。それに、ルソーの思想がフロンティアの生活と深いつながりをもっていたとすれば、カルヴィン主義がフランクリンのなかに「いささかの痕跡も残していなかった」（I 165）という指摘は、きわめて当然といえるだろう。パリントンはまた、ダニエル・デフォーの夢——つまり「みずからを環境の支配者としている、実際面で有能な人

間としてのロビンソン・クルーソー」に言及しながら、フランクリンこそは「その夢が新世界において目に見える形をとった姿であった」（I 166）と書いている。彼をとりまく「環境」がほかならぬフロンティアであったとすれば、たしかに彼は新世界アメリカとあらゆる形で結びついた典型的なアメリカ人であったといっても過言ではあるまい。

だが、「外遊に出発したときのフランクリンは、気質と環境によって民主主義者であった。帰国したときの彼は、信念によって民主主義者となっていた」（I 168）という発言は、一体なにを意味しているのだろうか。その「信念」を彼にあたえたのは、ヨーロッパにおけるいかなる経験であったのか。

外交上の交渉のためにロンドンにおもむいたフランクリンは、そこで「瀾漫した政治の腐敗」（I 168）を目撃する。本来、「イギリスに対する尊敬と、イギリスの伝統に対する賞賛」をもっていたフランクリンであるだけに、そのショックは大きかった。かつてイギリス生活を送ったこともあり、友人知人も多くいるだけに、彼らを裏切るような行動をとることは、フランクリンには耐えられないことだった。しかし、「イギリスの政府からアメリカが期待できるものは不名誉な従属以外のなにものでもない」ことを痛感した結果、彼は「独立という概念」を受けいれるようになる（I 169）。彼はまた、「この墮落した古い国のあらゆる階層の人間にひろがっている、極度の腐敗」にくりかえし言及してもいる。いかにしてイギリスの、ひいてはヨーロッパの「腐敗」や「墮落」からアメリカを守るべきか——これがフランクリンの最大の関心事となったとしても不思議はあるまい。当然のことながら、「独立という概念」は旧世界ヨーロッパから新世界アメリカへの「進歩」をうながす重大なモーメントであったという点に、パリントンは読者の注意をうながしているのである。

イギリスにおけるフランクリンは、1763年から1772年にかけて強い影響力をもっていた重農主義者たちの著作に接し、「農業を工業や商業に優先させる態度」に強く惹きつけられる。そして、アメリカとヨーロッパを比較した結果、「土地が豊富で、農民が自由土地所有者であるかぎり、アメリカは幸福で、満足した状態にあるだろう」という結論に達した彼は、「インダストリアリズム

という新しい中産階級の福音」を否定することになる。さらに、国が豊かになるための三つの方法を論じたフランクリンは、「戦争」と「商業」をそれぞれ「泥棒」と「詐欺」であるとして斥けたあと、「農業」こそは「唯一の正真な方法」である、と語っていた（I 173）。この態度は、農民を神によって選ばれた民、道徳の退廃を知らない人間とみなすジェファソンのそれと一致しているのである。あるいはまた、フランクリンは、「神から人間ににあたえられている才能を用いさえすれば楽園にすることもできるのに、世界を豚小屋にかえることを選んでいる社会の不合理性」に驚いて、「個人の幸福」が社会の究極的な目的であることは明白である、と述べていた（I 174）。個人の幸福の追求——これこそはやがてジェファソンの独立宣言に表明されることになる、きわめてアメリカ的な理念ではなかったか。パリントンがフランクリンは「ジェファソンの先駆者であった」（I 176）と断言しているのは、まことに適切な指摘であったといわねばならない。⁽⁴⁾

こう考えてくると、1776年におけるアメリカの独立は、単にアメリカがイギリスから政治的に独立したことを物語っているだけではない。それは「豚小屋」としての旧世界ヨーロッパから「楽園」としての新世界アメリカへの「進歩」をも意味していた。新世界アメリカに、旧世界ヨーロッパの「墮落」や「腐敗」とは無縁の、理想的な状態が実現したことを示す象徴的な事件であったといってもよい。だが、パリントンによると、独立戦争後のアメリカはその理想的な状態を維持することができなかった。「楽園」としてのアメリカを破壊しようとする危険分子、アレグザンダー・ハミルトンの存在が、アメリカの行く手に暗い影を投げかけていたからである。

しばしば指摘されるように、ハミルトンとジェファソンとは対照的な人物であった。ジェファソンが「政治家の偉大な目的」は「個々の市民の幸福」にあると考えていたのに対し、ハミルトンは「国家の物質的な権力と栄光」にあるとみなしていた（I 306）。パリントンのジェファソン観については別の箇所⁽⁵⁾にゆずるとしても、みずからをジェファソン主義者と呼んでいたパリントンにとって、ハミルトンや彼に代表される連邦主義者がどのような意味をもっていた

かは想像にかたくない。「18世紀のリベラリズムの二つのテストは、個人主義の原理と縮小化された国家の原理であった。ハミルトンは両者ともに否定した」(I 296)と書くとき、『アメリカ思想主潮史』の著者は不快感を露骨にあらわしている。ハミルトンはリベラリズムとしての歴史の否定者にほかならなかった。さらにまた、アメリカにおける産業革命を強力に推進していたハミルトンは、「貴族制」から「民主制」へ、「豚小屋」から「樂園」への「進歩」としての歴史の流れに、明らかに背をむけていた。いや、彼こそは、アメリカ史の流れを逆行させ、アメリカの「樂園」にヨーロッパ的な「腐敗」をもちこもうとしている張本人であった。「アメリカにイギリス的な経済体制とイギリス的な産業主義の体制をつくり出すことは、彼が抱懐している大目的を達成するための、もっともたしかな手段に思われた」(I 297)とパリントンは書いている。事実、ハミルトンにひきいられた連邦主義者がアメリカのヨーロッパ化を、「進歩」としての歴史の否定を実現させていたことは、私有財産の保護を目的とするとみられる憲法の制定や、資本主義的な傾向を強める中産階級の出現によって裏書きされているのである。

結局のところ、ジェファソンの理想が実現するのは、彼が大統領に選出されたときであった、とパリントンは考える。1800年という時点において、はじめてアメリカは旧世界ヨーロッパと完全に絶縁することができたのである。

旧世界からこちらにもってきたすべての階級制度に崩壊が訪れた。地方分権的な社会の自由経済は、君主制と貴族制の原則を破壊し、アメリカ精神を共和主義への冒険に準備させるための有効な媒体であることを証明した。外国のリベラリズムが、外国の保守主義に冷淡であることを明らかにした土地にさかえた。アメリカの流動的な経験がずっしりした形をとるにいたる鑄型を提供したのは、こうしたヨーロッパのリベラリズムであった(I 397)。

『アメリカ思想主潮史』第1巻の結末でパリントンのこう書くとき、アメリカの歴史がリベラリズムの歴史にほかならないことが明確に意識されている。旧

世界ヨーロッパから新世界アメリカへの「進歩」が、アメリカ史の本質であることが、はっきりと表明されているのである。

だが、ジェファソンの夢みた世界が「農業的なアメリカ」であり、「点在する農場の生産者たち」の世界であったということは、やはり見落とすことのない事実であった。上に引用した一節につづけて、パリントンは、19世紀の「新しい力」としてのインダストリアリズムがアメリカのために用意している「生活のパターン」が「ジェファソンによって代表される、国内的な経済体制をもった、より単純な農本主義のそれとはまったく異ったパターン」であることを指摘していた（I 398）。つまるところ、ジェファソン主義者としてのパリントンの思い描いていた理想のアメリカは、産業革命以前のアメリカ、「銀行、信用、弾力性のある通貨、投機の心理などをもった資本主義と、工場生産という技術をもったインダストリアリズム」が出現する以前のアメリカにほかならなかった。しかも、ジェファソンがフランクリンから受けついで「楽園」としての新世界という「マスター・シンボル」は、「大地の肥沃、成長、増殖、土の労働の至福を表現する隠喩」をふくみ、「農耕の至高の武器である聖なる鋤を手にした開拓農民の理想化された姿」を示している、というH.N. スミスの発言があったことを忘れることはできない⁶⁾。

どうやら、『アメリカ思想主潮史』の読者は、「進歩」としての歴史を信じる歴史家パリントンのなかに、農業的パラダイスの夢を追い求めるパストラリズムの影を読みとらざるを得ないようだ。リベラルで、ジェファソンのという彼の基本的な立場は、彼が新世界アメリカをエデン的な楽園とみなす「アメリカ神話」の信奉者であったことを、はっきり露呈する結果になっているといえよう。だが、1920年代のアメリカにおいて、インダストリアリズムを否定してパストラリズムにこだわりつづけるパリントンの時代錯誤性の指摘するのは、あまりにやさしすぎる。むしろ、アメリカをエデン的世界とみなす「アメリカ神話」がいつまでもアメリカの知識人のなかに強く残存しつづけている事実注目すべきではあるまいか。パリントンにおけるアメリカ人の研究というテーマの重要性は、いくら強調してもしすぎることはないのだ。

- 注(1) Gene Wise, *American Historical Explanation: A Strategy for Grounded Inquiry* (1973), p. 180.
- (2) D. W. Noble, *Historians Against History: The Frontier Thesis and the National Covenant in American Historical Writings Since 1830* (1965), p. 156.
- (3) *Ibid.*, p. 101.
- (4) フランクリンとジェファソンの「アメリカ性」については、Charles Sanford, "The Art of Virtue: Franklin and Jefferson," *The Quest for Paradise: Europe and the American Moral Imagination* (1961), pp. 114-134 を参照。
- (5) 拙稿「パリントンにおける大統領のイメージ」(『大阪外大英米研究』9) を参照。
- (6) H. N. Smith, *Virgin Land: The American West as Symbol and Myth* (1950: Vintage Books), pp. 138-9. 引用は永原誠氏訳(研究社)による。

2 失われたアメリカ

歴史家パリントンが『アメリカ思想主潮史』という大著を書いたのは、あくまでも彼のジェファソンの理想を主張するためであったといい切ってよい。彼の関心は、彼自身くりかえし強調しているように、アメリカ文学の文学的な評価にあったのではなく、ジェファソン主義の現代における復活という、広い意味の政治的色彩を帯びたものであった。だが、1920年代の後半において、ジェファソン主義者であることを自認し、ハミルトンの伝統を徹底的に批判することは、一体なにを意味しているのだろうか。このことを理解するためには、当時のアメリカ的状况に目をやってみる必要があると考えられる。⁽¹⁾

パリントンの書物の第3巻が未完のまま出版されたのは1930年であったが、この年に刊行された歴史家J. T. アダムズの評論集『アメリカへのサーチライト』に、「今日のジェファソンとハミルトン」と題する興味ぶかい一文がおさ

められている⁽²⁾。アダムズは二人の政治家の「完全な相違」に言及し、それは「明確で完全である」と述べたあと、このまったく相反するジェファソン主義とハミルトン主義とが平和共存しているアメリカ社会の奇妙な現象に注目するのである。彼の一文の目的は、「ジェファソンを口にしながら、ハミルトンを実践している」アメリカ人、7月4日にだけ前者に熱狂的な拍手を送っておいて、あとの1年間は後者の哲学を実行しているアメリカ人を非難することにあつたといつてよい。「人間がどんな哲学をもとうと、わたしの知ったことではないが、口にする哲学と実践する哲学がちがうというのは偽善である。偽善は、結局のところ、人間の魂を毒するのである」とアダムズは書いていた。

だが、ここで見落としてならないのは、アダムズが「個人的にはハミルトンよりジェファソンという人間が好き」であり、ジェファソンの夢みたアメリカに憧れていると告白したあと、「その一方で、未来は、過去がそうであったように、ハミルトンのものであると信じている」と書いている事実である。アダムズは別の箇所⁽³⁾で、ハミルトンが「強さと富と力」を代表し、ジェファソンが「アメリカの夢」を代表していると書いていたが、アラン・ネヴィンスに「アメリカの夢の歴史家」と呼ばれているアダムズはジェファソン主義であつたといえるだろう。とすれば、彼がさきに指摘したアメリカ人一般の「偽善」は、ハミルトンのアメリカにおいてジェファソンの理想を追求しているアダムズ自身の「偽善」にほかならなかつたのである。

ところで、『アメリカ思想主潮史』の第一巻が出版された1927年には、チャールズ・リンドバーグが大西洋横断の単独飛行に成功しているが、この歴史的な壮挙に対してアメリカ大衆が示した熱狂的な反応にもまた、アダムズのいう「偽善」がうかがわれるのである。その反応を詳しく分析したJ.W.ウォードによると、当時のアメリカ人は孤独な英雄の姿に「過去」のアメリカの栄光を読みとると同時に、航空機によって象徴される高度に発達した機械文明を生みだす「未来」のアメリカの繁栄に期待をかけることも忘れなかつたのである。「歴史の流れからの逃避」としてのアメリカと「歴史的な展開の一段階」としてのアメリカ——この二つの矛盾するアメリカ像がアメリカの大衆の反応には

っきりと露呈している、というのがウォードの見解であったが、前者がジェファソンのアメリカで、後者がハミルトンのアメリカであることは、あらためて指摘するまでもあるまい。L. W. レヴィーンは、このように過去と未来にひき裂かれたアメリカ社会の「緊張」に注目しているが、⁽⁴⁾それをアダムズ流に「偽善」と呼ぶこともできるにちがいない。

結局のところ、1920年代後半のアメリカにおいて、パリントンがハミルトンの「強さと富と力」を犠牲にして、ジェファソンの「アメリカの夢」を追究しつづけたのは、アメリカ的な「偽善」や「緊張」が出現する以前の世界、「樂園のアダム」としてのアメリカ人がエデン的なイノセンスを享受していた世界への憧憬が強く働いていたためであった。あの膨大な書物を彼に書かせたのは、この「アメリカ神話」への信念であったといえるだろう。だが、ハミルトンのアメリカを否定することは、産業主義の発達を、ひいては歴史の流れそのものを否定することを意味している。したがって、「アメリカ神話」の復活をめざす『アメリカ思想主潮史』3巻は幻想の上に成り立った世界であり、壮大なフィクションにほかならなかったのだ。ライオネル・トリリングが指摘しているように、この本が当時のリベラルたちの「ガイド」であったとすれば、アメリカの知識人は実現不可能な「アメリカの夢」に酔っていたといい切ることができるのである。

勿論、パリントンは、彼の理想とするジェファソン主義が危機に瀕しているからこそ、はじめから時代錯誤的な努力であることを知りながら、あえてジェファソンの立場を貫ぬこうとしたのだ、という見方も成り立つ。だが、いずれにしても、樂園としてのアメリカの実現を希求するパリントンの声は、「荒野の絶望的な声」であったというD. W. ノーブルの発言の正しさは認めるほかはないのである。⁽⁵⁾パリントンは「コネティカット・ウィッツ」について語ったとき、「彼らはある世代の牡蠣が別の世代の牡蠣に似ているのと同じように過去のアメリカに似ている未来のアメリカをせっせと夢みていた」と書いていたが、主語の「彼ら」を「彼」にかえれば、そのままパリントン自身にもあてはまる評言であったのだ。

こうした、あえてジェファソン主義者を自認するパリントンの反時代的なポーズは、彼と同時代のアメリカ作家がジェファソン主義や「アメリカ神話」に対して示した態度と考えあわせることで、さらに一層明確になってくる。たとえば、『アメリカ思想主潮史』の出版をハーコート・ブレイス社が引き受けた1925年には、F.スコット・フィッツジェラルドの『偉大なるギャツビー』が出版されているのだが、ここに描かれているのは、まさにジェファソンのな「アメリカの夢」の崩壊にほかならなかった。この小説の中西部人ニック・キャラウェイはきわめて牧歌的な夢を追い求めながら、同時にまた、それが現実世界においては見はてぬ夢であることを知っている。レオ・マークス流に言えば、「歴史の現実」をはっきりと認識しているのである⁽⁶⁾。だが、あくまでも18世紀のジェファソンに帰ろうとする中西部人パリントンは、作中のいま一人の中西部人であるギャツビーと同じように、「緑色の光」を、「僕達の進む前を年々先へ先へと後退して行く狂躁的な未来を信じていた」（野崎孝氏訳）のだ。ギャツビーとともに、「たえず過去へ過去へと運び去られながらも、流れに逆らう舟のように、力の限り漕ぎ進んでゆく」ことをやめなかったのである。パリントンがフィッツジェラルドについて書き残したメモのなかに、「自分がいかに生意気であるかを示すために、すべてを叩きこわすのを好む悪い少年。自分がいかに賢明であるかを示すために、気取ったことをいうのを好む頭のいい少年。早熟で、無知で——すでに燃えつきた短いロウソク」という言葉を記しているのは、まことにアイロニカルであるといわねばなるまい。

たしかに、「歴史の現実」を見ぬくことができなかった歴史家というのは、まさに言葉の矛盾であって、まったく存在理由をもっていないといえるかもしれない。小説家フィッツジェラルドを理解できなかった事実は、パリントンが文学的感受性を欠いていただけでなく、歴史感覚すらも欠いた、時代おくれの歴史家であったことを物語っていると考えられる。だが、まことに奇妙なことだが、『アメリカ思想主潮史』の著者は、20世紀のアメリカにおいて「アメリカ神話」が完全に形骸化してしまったことに気づいていた。ジェファソン主義の支配するアメリカがもはや「失われたアメリカ」になってしまっていること

を、彼ははっきりと知っていたのである。そのことを明確に示しているのは、「シンクレア・ルイス——われらがディオゲネス」という一文にほかならない。このみじかいルイス論は1927年にワシントン大学からパンフレットの形で出版され、未完におわった『アメリカ思想主潮史』の第3巻に付録としておさめられているが、アメリカの現実をまえにしたパリントンの苦悩と困惑を、そこに明瞭に読みとることができるのである。

まず、パリントンは『メイン・ストリート』や『バビット』や『アロウスマス』などの問題作を矢つぎ早に発表したルイスが、「アメリカ文学の悪童」(III 360)的存在であることを明らかにする。この作家は、ありとあらゆる分野のアメリカ人を批判的に描いていて、彼の手にかかると「自由に生まれた、世界とその運命の支配者としてのアメリカ市民」の愚かさが暴露され、徹底的に嘲笑されることになる。こうして、ルイスは18世紀イギリスの諷刺作家よりもきびしい筆づかいで、アメリカの仮面をはいで見せるののだが、そこにあばき出されるのは一体なにか。ルイスの目に映ったアメリカは、いかなる素顔を呈しているのか。

このりっぱなアメリカ合衆国に住んでいる人間は、かつて野原を歩きまわっていた牛の群と同じように、鼻のむいている方向ならどこでも間抜け面をして押し進んで行く強力な群衆である。…〔だが〕もっと批判的に考え、個々のメンバーを切りはなしてみると、愚鈍で、頭脳と精神は弱く、みずからの偉大さに対する虚栄がぎっしりつまっているように、リアリストには思われる (III 362)。

結局のところ、アメリカ人というのは、「この大陸を征圧してはいるが、それに秩序も体裁もあたえることのできない巨大な仲買人の群」ということになる。

というのも、ルイスの描いているアメリカ人たちは、真や善や美などといったものには興味を示さないし、キリスト教も民主主義も理解することのできない「商人や不動産業者」ばかりである。そして、「合理的で人間的な理想」(III

362)などいっさい持ちあわせていない連中の住んでいるアメリカは、ただの「物質的に豊富な国」になってしまって、そこでは「いい生活は手数料と歩合ではかられるものになりはて、文明はブローカーのところで花開いている」(Ⅲ 363)のである。たとえば、『メイン・ストリート』の背景となっているゴウファー・プレアリーは、かつて「農業的アメリカの心臓部」であった。パリントン好みの表現を用いれば、ジェファソンの農業パラダイスの母体となっている世界であった。そこには「古めかしくて、親切で、近所づき合いのいい、健全な民主主義の美德」が残っていると、一般に考えられているが、ルイスの「冷酷な分析」によると、そこにあるのは「みずから求め、みずから守っている奴隷制度」だけであって、「退屈さ」が君臨してさえいる。かつて「民主主義」の谷といわれた地域は、はるかかなたの都市のために、すっかり影のうすい存在になってしまったのである(Ⅲ 364)。

というよりも、その都市がアメリカ人の生活と切りはなせない世界になったことを、ルイスの小説は物語っている。『バビット』に描かれているゼニスこそ、「偉大なアメリカの庭園の、もっとも輝かしい、あでやかに咲くひまわりの花」にはかならない。ここでパリントンが「庭園」とか「ひまわり」とかいったイメージをもちこんでいるのは、アメリカの農業国から工業国への変化を巧妙に暗示するための戦略であったといえよう。さらに、そのゼニスに住む不動産仲買人のバビット氏は、「地上を征服している勝ちほこったアメリカ人の資質を完全に具現した人間のポートレート」(Ⅲ 364)となっている。ゼニスの現実、ほかならぬアメリカの現実なのだ。ルイスはバビットやギャントリーやアロウスマスの世界を描くことによって、「自由な者の土地、勇敢な者の故郷」(Ⅲ 365)としてのアメリカ、「楽園」としてのアメリカが永久に地上から消え去ったことを確認しているのである。「勝ちほこる物質主義の国」アメリカのイメージを提起しているルイスは、「そのような国はもはや救われる見込みがない」(Ⅲ 363)ことを明らかにしているのだ、とパリントンは書いているが、それはそのままパリントン自身の感概であったといってもよい。

他方、こうしたルイスのアメリカ像に対しては、多くの批評家によって反論

がなされているが、その事実は新世界アメリカがいかに墮落してしまったかを証明しているにすぎない、とパリントンはある。たとえば、ルイス批判者は、彼が「極端な乱視のケース」であって、「ノーマルな視力」を欠いているために、世界を正しく認識することができない、と主張する。『バビット』の著者は、「このゆがんだ視力」のために、「アメリカの善良な市民たちが抱えている理想」（Ⅲ 365）に批判や悪口を浴びせかけることになるのだ、と批評家たちは反論するのである。だが、その「理想」の実体はいかなるものなのか。それは「ゆたかな、豊かな生活」という理想にほかならぬ。この批評家たちにいわせると、「ゆたかな、豊かな生活」こそは、「この国を西欧文明のほかのすべての国から切りはなしている、アメリカの特性」(Ⅲ 366)であって、ルイスのはげしいアメリカ批判にもかかわらず、「産業革命」が「民主主義の理想」に従属されている例は、世界のどこを探しても見つからないということになる。この「繁栄する国」アメリカにおいて、はじめて「安楽と便宜との結合」が可能になっているというべきであって、その点を見落としているルイスの発言は、見当はずれもはなはだしい、という声が聞かれもするのである。

だが、ルイス自身がこの種の反論にいささかも動ずることがないのはなぜか、とパリントンは問いかける。それはルイスが「物質的な進歩という現代の理想」(Ⅲ 366)に幻滅しきっているからである。というよりも、ルイスが「物質的な進歩」などとはまったく別物の「理想」の持主——「19世紀末の活気にあふれたユートピア主義に育てられた抜きがたい理想主義者」であるという事実を見落としてはならない。彼は「この国で当時さかんであったすべての理想主義——ジェファソンの民主主義とマルクスの社会主義」(Ⅲ 366—367)とから学ぶところが多かったのだが、第一次大戦のために彼のユートピアの夢はくずれてしまったのだ、とパリントンは書いている。だが、「理想主義者」ルイスが味わったアメリカの「物質的な進歩という現代の理想」に対する幻滅ということになると、それはそのまま「理想主義者」パリントン自身の幻滅ではなかつたろうか。どうやら、パリントンは、ほぼ同じ世代で、同じ中西部出身者であるルイスの「理想」と「幻滅」を語ることで、みずからの「理想」と「幻滅」に

表現をあたえているといえるようだ。

では、一体いかなる「理想主義者」ぶりをルイスは発揮しているのか。たしかに、ルイスはアメリカの現状に幻滅している。アメリカの大衆がおろかで、愛するに値しないこともみとめている。彼らが「虚勢にふくれあがり、欲望に毒され、インチキや嘘偽といい仲である」ことも否定しない。しかし、ルイスは「われわれのあわれな人間性に対する消えのこりの信念を、いぜんとしてもちつづけている」とパリントンは書いている。

そのあわれむべき無気力さにもかかわらず、人間性は完全に悪ではないし、人間はまた、シニカルな連中が信じさせようとしているほどに無力な環境の産物でもない。…ごくまれだけれども、バビットでさえ、彼の偶像の足が粘土でできていることに、かすかに気づいている。エルマー・ギャントリー的な人間がいれば、マーティン・アロウスマスのような人間がいるのだから、人間性は、その気になりさえすれば、ワナから抜け出することもできる。悪い社会機構が悪い人間を作り出す(Ⅲ 367)。

したがって、銀行家や中産階級を社会から追放しさえすれば、アメリカにはかつての文明と同じすばらしい文明が出現することができる、とルイスは考えている。それゆえに、とパリントンは明言する。その「新しさと、幻滅」にもかかわらず、「シンクレア・ルイスはいぜんとしてジャン・ジャックの、そして啓蒙思想の黄金の希望の反響である——遠くてかすかであることはたしかとしても、やはり正真正銘の反響にほかならない」(Ⅲ 367)。

いかにも大げさな発言にはちがいない。「理想主義者」ルイスを語る言葉としては、いささか場ちがいではあるまいか、という印象を受けるとしても不思議はないだろう。だが、ジェファソン主義はフランスの啓蒙思想の哲学と切りはなすことができなかつたのだし、「ジャン・ジャックの子」であることがパリントンにおけるヒーローの条件であることを知っている読者は、ここにルソンの名前がもちこまれている事実を、むしろ当然のこととして受け入れるにち

がない。要するに、『アメリカ思想主潮史』の著者は、みずからと同じ精神をルイスのなかに見いだしたということなのだ。だが、それにしても、「幻滅」から「黄金の希望」への転調はあまりにも唐突ではあるまいか。

このパリントンの奇妙なレトリックについて、ジーン・ワイズは非常に興味ぶかい分析を試みている。それによると、シンクレア・ルイス論におけるパリントンは、つぎのような「戦略」を用いていると考えられる。

まずアメリカ人の罪を叱り、この国における悪をつぎつぎに列挙して、あらゆる希望を放棄しているように思われるが、やがて全面的に絶望するかに見えた瞬間、突然コースを変えて、信念の梯子をのぼりはじめる（というか、逃げはじめ）。……アメリカのあらゆる欠点がふんだんにみとめられるが、そのためにパリントンは希望を捨てたりはしない。かすかにきらめく光が姿を見せているかぎり、彼は正しい進歩のための戦いに備えて武装するのである。⁽⁷⁾

要するに、パリントンは、「勝ちほこる物質主義の国」アメリカを目のあたりにして、一瞬「幻滅」に似た気持を味わうが、彼の本質的な「ジェファソン主義」や「進歩としての歴史」に対する信念はいささかも崩れることがないというのである。それが「ジャン・ジャックの子」としてのルイスに対する共鳴となって、ほとぼり出たのだといってもよい。あの「幻滅」から「希望」へのめくるめく上昇は、パリントンの「信念の梯子」によってはじめて可能になった、というワイズの説明には、さからいがたい説得力がこもっているように思われる。

だが、パリントンのルイス論は、「理想主義者」としてのルイスにささげられた賛辞でおわっているわけではない。あの熱っぽい文章のすぐあとにつづけて、パリントンは、「中産階級の理想に対する告発」にあふれたルイスの作品が「幻滅に身をまかせた、不満を抱いている世代の徴候をあらわすドキュメント」であることをふたたび強調したあと、「アメリカの信念は死にたえている」（III 368）とはっきり書き記しているのである。さきに「幻滅」から「希望」

へと、「信念の梯子」を一気にかけるぼった彼は、ふたたび「幻滅」の奈落に転落している。ジーン・ワイズの比喩にこだわるなら、「信念の梯子」をのぼりつめたパリントンは、その「梯子」そのものがまったく頼りにならない、いや、「進歩」としての歴史を信じつづける彼の願望が生み出した夢のかけ橋にすぎないことに気づいているといってもよいだろう。「幻滅」から「希望」、「希望」から「幻滅」へというめまぐるしい転調は、「アメリカの信念」に対する彼の不安感を、そして、その結果として生ずる彼自身のアイデンティティの混乱を暗示しているのではあるまいか。

パリントンによると、シンクレア・ルイスの描く人間は、「生きた人間ではなくて、人間の影」にすぎず、「生命の消え失せた信念も希望も創造的エネルギーもない、みずからが死んでいることさえも気づかない、ただの抜け殻」(III 368)にすぎない。たとえば、バビットという人物は、「うつろな魂」の持主であって、「万人に共通の空虚さの象徴」になっていると考えられる。結局、この人物は「歴史的にいえば、18世紀のゆたかな肉体から生まれた文明がアメリカにおいてついに消滅したことを示している」。それは「啓蒙思想の偉大な時代によってあたえられた栄養で育っていた希望」が消滅したことを示している、といいかえても同じことだ。こうしたパリントンの指摘につづくつぎの一文を読めば、彼のいう「アメリカの信念」の意味はおのずから明らかになるだろう。

人間の優秀さ、進歩の原則、正義の究極的な支配、自然の征服、民主主義の絶対性と充足性などに対する信念、つまるところ生命の優秀性に対する信念は、あの初期の、より単純な時代には偉大な推進力であった。それは高貴な夢——あの啓蒙思想の夢であったが、それが同じく18世紀に発生した、すべてをつつみこむ物質主義によって、ゆっくりとかき消されてしまった。機械に対する信念が人間に対する信念にとってかわった。産業革命がフランス革命の希望を埋没させた。そして、いまや正義や進歩や人間性の可能性や民主主義の優秀性に対するわれわれの信念が有毒な貧血症にやられてしまうほどに、われわれは下落してしまっている (III 369)。

ここには、あのジェファソンの「アメリカの夢」のおわりがはっきりと宣告されているのである。

とはいうものの、「シンクレア・ルイス」というエッセイは、かならずしも「幻滅」の調子でおわっているのではない。パリントンの上の引用文につづく最後のパラグラフで、「われわれはみんな、より大きく、より豊かで、よりよいアメリカのための運動に結集しなければならない。だから、いやいやながら、いろいろな点でいい人間であるという事実にもかかわらず、われわれはシンクレア・ルイスを否定するのである」(III 369)と書いている。勿論、「より大きく、より豊かで、よりよいアメリカ」とは、ジェファソン主義や啓蒙思想の精神を忘れはてたアメリカ、「物質的に豊かな国」としてのアメリカをさしている。それはまさしくパリントンをとりまく現実のアメリカの姿にほかならない。そのアメリカをまえにしながら、「いやいやながら、いろいろな点でいい人間であるという事実にもかかわらず」、ルイスを否定するというのは、なんともふっきれない態度といわねばなるまい。「理想主義者」ルイスに対するこの愛着ぶりには、パリントン自身の度しがたいまでの「理想主義」が露呈していると考えべきではあるまいか。ジーン・ワイズ流に言えば、現実のアメリカを自分の目のまえにしながら、パリントンはまたしても「信念の梯子」に足をかけはじめている、ということになるだろうか。ここまでもまた、リベラルで、ジェファソンの立場にこだわるアメリカ人パリントンにおけるアイデンティティの混乱を指摘せねばなるまい。

こうした「幻滅」と「希望」のいりまじった態度は、結局のところ、パリントンが「進歩」としての歴史を信じつづける歴史家であったという事実由来している。そして、その点は、1940年以降において、ライオネル・トリリングをはじめとする一群のアメリカニストたちから手きびしい批判を受けることになるのだが、⁽⁸⁾シンクレア・ルイス論にうかがわれる一見いかにも楽天的な「理想主義者」パリントンの苦悩、すくなくとも彼の困惑に、読者は目をとめる必要がありはしないだろうか。あえて「信念の梯子」をのぼりつづけることで、現実の姿に背をむけながら「アメリカ神話」に固執しつづける彼の姿には、ア

メリカ人であることの複雑な運命がやはりはっきりと読みとれるのである。

- 注(1) 以下の若干のパラグラフは、拙稿「V. L. パリントンとアメリカ神話」(『英語文学世界』1973年4月号)および「V. L. Parrington 再考」(『大阪外国語大学学報』29号)と重複していることをお断りしておく。
- (2) J. T. Adams, *Searchlights on America* (1930) 参照。
- (3) J. T. Adams, *The Epic of America* (1931) 参照。
- (4) J. W. Ward, "The Meaning of Lindbergh's Flight," *Red, White, and Blue* (1969); L. W. Levine, "Progress and Nostalgia," *The American Novel and the Nineteen Twenties*, ed. by Malcolm Bradbury and David Palmer (1971) 参照。
- (5) D. W. Noble, *Historians Against History: The Frontier Thesis and the National Covenant in American Historical Writings Since 1830* (1965), p. 99.
- (6) Leo Marx, *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America* (1964), p. 363.
- (7) Gene Wise, *American Historical Explanations: A Strategy for Grounded Inquiry* (1973), p. 268. なお、ワイズは同じ立場から、パリントンの“A Chapter in American Liberalism”を分析している。
- (8) 拙稿「『楽園』とアメリカの現実」(『不死鳥』40号)および「マシーセンと悲劇的ヴィジョン」(『英語文学世界』1976年4月号)参照。

Summary

The Americanness of V. L. Parrington

Koji Oi

Very few are interested in Parrington the historian today, but we cannot neglect the importance of Parrington the American who defined himself as both “liberal” and “Jeffersonian.” By considering what made him write the multi-volume *Main Currents in American Thought* (1927-30), we would discover the particularly American ideals and motives hidden in this progressive historian and would also realize that his major work is the result of his almost desperate quest for the American identity in the turbulent twenties. The first part of this paper, “History as Progress,” takes up Parrington’s belief in the idea of progress and relates his “liberal” and “Jeffersonian” stance with his commitment to the “American myth of the garden.” The second part, “Lost America,” deals with Parrington’s disillusionment with the American scene and his incorrigibly optimistic dream of the Jeffersonian republic, chiefly discussing his essay on Sinclair Lewis included as an appendix in Volume Three of *Main Currents*.